

カリキュラム・マネジメントの考え方とこれからの教育課程のあり方

—「社会に開かれた教育課程」に基づいて—

磯 田 三津子

埼玉大学心理・教育実践学講座

キーワード：カリキュラム・マネジメント、「社会に開かれた教育課程」、上越市立大手町小学校

1. はじめに

次期学習指導要領(平成29年3月公示)において注目すべきキーワードのひとつにカリキュラム・マネジメントがある¹⁾。カリキュラム・マネジメントが目指すのは、それぞれの学校が地域の子どもたちの特質を踏まえ、未来を生きる子どもたちにとってより良い学習を創造することのできる教育課程の編成とその実践に取り組むことであると考えることができる。もちろん、これまでも、学校独自の教育目標を掲げ、その目標に基づいて、各学校で教育実践が展開されてきたことは言うまでもない。とはいえ、多くの学校では、教育目標と教育課程を関連付けることは少なく、学習指導要領や自治体が作成した教育課程に基づいて、日々の授業を展開する状況が多いのも実際である。

次期学習指導要領では、カリキュラム・マネジメントとして、各学校において、子どもたちにとって必要な資質・能力を明らかにし、それに到達するための教育課程を編成することが強調された。それに伴って教師は、未来を生きる子どもたちにとって何が必要であるのか、そのためにどのような資質・能力を育成したら良いのかといったことを、教師自らが明らかにし、教育課程を創造していかなければならない。したがって、教師には、教育課程を実施する立場だけではなく、教育課程を編成し、実施し、改善する立場になることが今まで以上に期待されているのである。

さらに、カリキュラム・マネジメントと並んで、注目すべきであるのが、「社会に開かれた教育課程」である。この言葉も、教育課程に関わる重要なキーワードとして注目すべきである²⁾。ここでは、社会や世界の状況を踏まえ、よりよい社会を創ること、そしてこれからの社会で自らの人生を切り拓いていくことのできる資質・能力を明らかにし、教育課程を編成することが期待されている。そのためには、地域の人々などの外部資源も取り入れることが大切なのである³⁾。

以上のように、学習指導要領の改訂において、カリキュラム・マネジメントや「社会に開かれた教育課程」の必要性が主張されたものの、その考え方については、いくつかの文献において明らかにされはじめたばかりである。各学校で「社会に開かれた教育課程」の考え方を取り入れたカリキュラム・マネジメントに取り組むためにも、具体的に、どのように子どもたちに育てたい資質・能力を明確にし、目標を設定したら良いのか、そしてその目標に基づいて教育課程を編成・実施・評価するにはどうしたら良いのかについて明らかにすることが必要である。

そこで、本稿では、カリキュラム・マネジメントの考え方について、「社会に開かれた教育課程」と関連づけて整理する。そして、その考え方に基づいた教育課程のあり方について考察することを目的とする。そのために、本稿では、以下の手続きにしたがって、論を進めていく。第一は、次期学習指導要領に向けた審議の内容におけるカリキュラム・マネジメントの議論をまとめることである。第二は、カリキュラム・マネジメントについて論じられた文献をとりあげ、その考え方がど

のように捉えられているかを「社会に開かれた教育課程」と関連付けて整理することである。第三は、カリキュラム・マネジメントを実践している上越市立大手町小学校（以下、大手町小学校と称す）⁴⁾の実践をとりあげ、学校の目標に基づいてどのように教育課程を編成し、実践しているのかについて考察することである。

2. カリキュラム・マネジメントの考え方

本章では、次期学習指導要領の改訂に向けた審議では、どのようにカリキュラム・マネジメントの必要性が主張され、その考え方が示されているのかについて整理する。

2016年12月21日に開かれた中央教育審議会における資料の一つに「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」がある。本章では、この資料に焦点を当て、カリキュラム・マネジメントという言葉の持つ意味について考察する。

前述した資料の中に教育課程に関する記述は、主に、四つの章の中に示されている⁵⁾。一つ目は、「第3章『生きる力』の理念の具体化と教育課程の課題」の中の「2.『生きる力』の育成に向けた教育課程の課題」である⁶⁾。ここでは、先ず、これまで主張されてきた「生きる力」を具体化し、未来を生きる子どもたちにとって必要な資質・能力を育成するための教育課程を編成することの必要性があげられている。次に、子どもたちが教科等の学習を通じて「何を知っているか」とどまらず、それを用いて、子どもたちが「何ができるようになるのか」にまで到達することのできる教育課程が必要とされているのである。これは、例えば、教科の学習で習得した知識・技能を総合的な学習の時間で発表・議論するというように、ある教科で学んだことを用いて、他教科等と関連付けながら子どもたちの資質・能力を高めていくことであると考えることができる。そこで、注目すべきであるのが、教科等の目標や内容を再整理するための視点となる三つの柱である。三つの柱は、以下の通りである⁷⁾。

- ① 何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）
- ② 理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）
- ③ どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

上記の三つの柱を中心的な目標として、教育課程を編成することが求められている。さらに、各学校でカリキュラム・マネジメントを行う際には、以上の三つの柱を踏まえつつ、どういった資質・能力を育てることを各学校の教育目標として設定するかが重要な課題となってくる。

二つ目は、「第4章 学習指導要領等の枠組みの改善と『社会に開かれた教育課程』」である。「社会に開かれた教育課程」は、次の三つの考え方に基づいている⁸⁾。

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を

活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

以上からわかるのは、子どもたちがこれからの社会をより良くすることができ、その中で自分自身を生かすことのできる資質・能力を育むこと、そしてそのためには地域との連携も視野に入れた教育課程を編成することが必要ということである。以上を踏まえ、カリキュラム・マネジメントを実現するために、以下の三つの側面を取り入れることが必要となってくる⁹⁾。

- ① 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- ② 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③ 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

このように、カリキュラム・マネジメントを具体化するためには、子どもたちが設定した目標に到達することをめざし教科横断的なカリキュラムを作成すること、そしてその目標には、目の前の子どもたちの現状に対応したものを設定していくことが大切である。そして、教育課程は常にPDCAサイクルに基づいて評価し、改善すること、そして教育課程に従って実践するうえで、地域の人々など外部の資源を積極的に取り入れていくことが必要なのである。

三つ目は、「第6章 何を学ぶか—教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成」である¹⁰⁾。ここでは、「様々な資質・能力は、教科等の学習から離れて単独に育成されるものではなく、関連が深い教科等の内容事項と関連付けながら育まれるものであり、資質・能力の育成には知識の質や量が重要である」と記されている。例えば、思考・判断・表現は、単一の教科等で育成されるものではない。それは、むしろ各教科及び、総合的な学習の時間との関連を図り、思考・判断・表現する場を設定していく必要がある。その他にも、多様な意見を受け入れること、人々との協働など、子どもたちに育成すべき様々な資質・能力がある。これらの資質・能力を育てるためには、単一の教科では難しい。したがって、教科横断的な教育課程を編成し、子どもたちに育てたい資質・能力を育成することをめざすことが大切なのである。

四つ目は、「第9章 何が身に付いたか—学習評価の充実」である¹¹⁾。ここでは、編成し実施された教育課程を評価し、改善することの必要性が強調されている。つまり、次期学習指導要領では、子どもたちに必要とされている資質・能力を育成するために、個々の授業等ではなく複数の授業等をつないだ教育課程を編成し、実施し、それを評価することまでが求められているのである。

3. カリキュラム・マネジメントと「社会に開かれた教育課程」の考え方

本章では、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の中で記されている「社会に開かれた教育課程」という言葉と関連付けてカリキュラム・マネジメントの考え方について考察する。

まず、ここでは、前章の内容をまとめていきたい。前章では、次期学習指導要領の審議に関する資料を基に、教育課程という観点から、今、何が各学校の教育課程に求められているのかを整理した。その結果、カリキュラム・マネジメントに含まれる考え方の中に、4つの視点を取り入れ

た教育課程を各学校で作成することが必要であることが明らかとなった。4つの視点は次の通りである。(1)「知識・技能の育成」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」の三つの柱と同時に、地域の子どもの実態に即した教育目標を設定し、教育課程を編成・実施・評価すること。(2) より良い社会を創り、社会で自らの人生を切り開けるような資質・能力とは何かを明らかにし、教育課程を編成すること。(3) (1) と (2) を実現するために、教科等横断的な教育課程を構想し、実施した教育課程をPDCAサイクルにしたがって評価し改善をはかること。(4) 地域の人材など外部資源を取り入れた教育課程を構想することである。

以上から分かるのは、教育課程をつくる際に重要なのは、「知識・技能の育成」「思考力・判断力・表現力の育成」「学びに向かう力・人間性等の涵養」の三つの柱に加え、地域の子ども独自の必要性に応じること、そして子どもたちがより良い社会づくりに参加しそこで自分自身を生かすことのできる資質・能力が何かを学校独自で明確にし、目標として設定することである。そして、この目標が設定されてはじめて、教育課程の編成へと向かうことになるのである。教育課程編成に関しては、設定した目標にしたがって横断的に教科等の内容を組み合わせる。その際に、外部の人材等を受け入れつつ教育課程を構成してPDCAサイクルに従って教育課程の評価と改善を繰り返すことが理想である。

カリキュラム・マネジメントとは、「カリキュラムを主たる手段として、学校の課題を解決し、教育目標を達成していく営み」である(田村、2016年、p.12)。ここで大切なのは、学校の課題を明確にし、それに取り組むための目標を各学校が設定することである。その際に、取り入れるのが「社会に開かれた教育課程」の視点である。田村は、以下のように述べている。

知識の取得はもちろん重要ではあるものの、これからの社会においては、身の回りに生じる様々な問題に自ら立ち向かい、その解決に向けて、異なる多様な他者と協働して力を合わせながら、それぞれの状況に応じて最適な解決方法を探りだしていく力をもった人材こそが求められていると考えられます。(田村、2017年、p.13)

田村が述べている通り、今日の子どもたちには、その時々課題と向かい合うことが必要である。なぜなら、社会の急激な変化やグローバル化に伴って、現在、学校で学ばれている知識・技能が、必ずしも普遍的なものであるとは限らないからである。今、子どもたちに求められている資質・能力は、知識を活用し、自分の考えを形成し、新たなアイデアを創造できる能力なのである(田村、2017年、p.13)。そして、そのための基盤となるのが、前章で記した三つの柱である。この三つの柱を基盤に、常に現在の社会的状況やその変化に対応した課題を明確にし、それを教育目標として設定し、教育課程を編成することが大切なのである。

その際に、重要なのが他教科等との連携した教育課程である。田村によれば、特に、総合的な学習の時間と生活と連携し、学校が設定した目標を実現できるように教育課程を編成することが重要であると述べている(田村、2017年、pp.41-42)。なぜなら、教科で学んだ内容に基づいて調べたり発表したり総合的な学習で発展させること、反対に総合的な学習で取り組んだことが教科における学習の動機付けや理解の深化につながるからである(田村、2017年、p.42)。これを整理し、田村は、次の三つのように教育課程を編成できると述べている(田村、2017年、pp.42-44) それは、A「各教科等の学習を総合的な学習の時間に生かす」、B「総合的な学習の時間を各教科に生かす」、C「生活科を中核にしたスタートカリキュラム」である。

以上のように、「社会に開かれた教育課程」とは、学力の三つの柱を基盤に、急速に変化する社会を生きる子どもたちにとって必要な資質・能力を明確にし、それを教育目標として各学校が設定すること。そして、それに基づいた教育課程を創造することであると考えることができる。教育課程には、総合的な学習の時間や生活と各教科を関連付けること、そして教育目標の実現に向けて地域の人々など外部資源の活用も視野に入れることが求められているのである。

4. 実践事例にみるカリキュラム・マネジメント—上越市立大手町小学校の取り組み

本章では、「社会に開かれた教育課程」の考え方に基づいたカリキュラム・マネジメントをどのように実践したらよいのか、実践事例を通して明らかにする。そのために、本章では、カリキュラム・マネジメントの先駆的な研究を行ってきた大手町小学校の実践を考察する。

大手町小学校は、平成24年から5年間にわたって「真の〈自立〉と〈共生〉を目指す教育課程の創造」という研究主題に基づいて研究・実践を進めてきた¹²⁾。笠原によると、大手町小学校の研究は、次期学習指導要領の目指す内容と重なる部分が多い（笠原、2017年、p.3）。その教育課程は、「人とつながる・社会とつながる・世界とつながる」を視点に整理されていくものである（笠原、2017年、p.3）。このように、大手町小学校の教育課程は、「社会に開かれた教育課程」の具体例としても注目すべきであろう。

教育課程の編成に向けて、大手町小学校は、子どもたちに育てたい6つの資質・能力を抽出した。それは、「探求力」「コミュニケーション力」「情報活用力」「創造性」「自立性」「共生的な態度」である¹³⁾。大手町小学校は、前述した子どもたちに育てたい資質・能力にアプローチするために教科を6領域にまとめた。6領域は、「生活・総合」（生活・総合）、「理数」（算数・理科）、「ことば」（国語、外国語活動）、「創造・表現」（図工・家庭科）、「健康」（体育）、「ふれあい」（共生的な態度を育む）である¹⁴⁾。以上の6領域に「学びの時間」を加えて、教育課程を作成した。「学びの時間」は、教科で学んだことを連絡帳や学びのシールにまとめ内省的な思考を促すことをめざす時間である¹⁵⁾。

大手町小学校は、「生活・総合」を教育課程の中核として位置づけている¹⁶⁾。前章においては、総合的な学習の時間や生活と各教科を関連付けたカリキュラムを構成することの意義について、田村の指摘に基づいて述べた。大手町小学校によると、「生活・総合」と各領域を関連付けた学習を展開することによって子どもの学びがより深まる¹⁷⁾。大手町小学校では、対象と関わる体験活動、そして自分の考えを整理する言語活動を相互に繰り返す。こうした「生活・総合」の活動が子どもたちの「探求力」を育むのである¹⁸⁾。

それでは、具体的に、大手町小学校ではどのような教育課程を創造し、教育実践を展開しているのかについて考察したい。ここでは、生活を教育課程の中核に位置づけている1年を例にあげる。まずは、1年の教育課程である。1年の生活は、4月から5月にかけての「安心スタートプラン」と、5月半ば以降から始まるヤギの飼育に関する活動を中心とした学習の大きく二つに分けることができる¹⁹⁾。「安心スタートプラン」には7つの特徴がある²⁰⁾。「安心スタートプラン」は、生活を中核に位置づけ、「なかよし」というキーワードでつないでいる。たとえば、「創造・表現」領域では、「リズムとなかよし」「うたとなかよし」「ねんどとなかよし」といった活動を行い、「数理」領域では、「かずとなかよし」といった数に親しむ学習をする。全職員による支援として、「先生となかよし」のコーナーを設け、学校職員が自己紹介やパフォーマンスを行う²¹⁾。「安心スタートプラン」は、

すべての子どもたちが小学校に慣れて楽しいと思える状況を作り出すことを意図していることは言うまでもない。それに加え、こうした活動を通して「共生的な態度」「コミュニケーション力」の二つを育成することができる。なかでも、「ふれあい」領域の中で、「ぜんこうのみんなとなかよし」という活動は、全校縦割り班によるなかよし活動である。異年齢の学年が交流しながら「共生的な態度」を育成していることがわかる。この活動においては、「コミュニケーション力」も育成されることが考えられる。

次に、ヤギの飼育に関わる生活の教育課程である。ヤギに関するテーマは、5月半ば以降年間を通して実践された。その流れは、「ようこそやぎさん」(11時間)、「やぎさんのしゅっさん」(6時間)、「やぎさんとあそぼう」(15時間)、「やぎさんといっしょに〇〇したい」(20時間)、「やぎさんといつまでもいっしょ」(12時間)である²²⁾。そこで注目すべきであるのは、「ことば」領域と「創造・表現」領域との関連である。たとえば、「創造・表現」領域には、「やぎさんソングをつくろう」という活動がある。歌詞やメロディを創作することは、子どもたちにとって簡単なことではない。ところが、生活の学習の中で親しんでいるヤギをテーマにすることによって、子どもたちは、音楽をイメージしやすくなるのと同時に、歌をつくりたいという意欲を高めることができる。

そのことは、「ことば」領域でも同様である。「ことば」領域では、ヤギさん絵本の物語を作成する活動がある。そこで、授業者の上原は、ヤギとの触れ合いが増えるにつれて、ヤギへの気づきが深まり、思いが高まっていくこと、そしてその気づきや思いを「書きたい」「伝えたい」と考えるようになったと報告している²³⁾。こうした子どもたちの気持ちに基づいて、物語を考え、表現する学習は、「創造性」「探求力」「情報活用力」を育成するのに意味がある。そして、子ども同士がいろいろな意見を聞き合い共同して物語をつくる活動ことは「コミュニケーション力」や「共通的な態度」の育成にも発展するのである。

5. おわりに

本稿は、カリキュラム・マネジメントの考え方を「社会に開かれた教育課程」と関連づけて整理し、その考え方に基づいて、どのようにカリキュラムを編成し、実践することができるのかを考察してきた。カリキュラム・マネジメントにおいては、次の3点が必要である。第一は、急速に変化する社会や世界を踏まえ未来を生きる子どもたちにとって、どのような資質・能力が必要であるのかを、各学校が明らかにし目標を設定することである。第二は、その目標に基づいて、教科横断的な教育課程を構成することである。第三は、生活、総合的な学習の時間と積極的に各教科を関連づけて教育課程を通して、子どもたちの探究心や表現力を高め、教科学習への意欲を高めることである。第四は、編成した教育課程を実施し、PDCAサイクルにしたがって、評価することである。

本稿では、カリキュラム・マネジメントのあり方を探るために、大手町小学校が研究し、開発した教育課程の中でも、特に1年を対象に考察した。大手町小学校の教育課程の特徴は、「生活・総合」を教育課程の中核に位置づけていることである。「生活・総合」における追求活動は、「『探究力』を高め、他教科との学びをつなぎ、深める推進力となる」とのことである²⁴⁾。「生活・総合と各教科を関連付けることは、各教科で習得した知識・技能を、各学校が設定した学校目標に子どもたちが到達できることを促す可能性がある。

カリキュラム・マネジメントの重要な側面に、教育課程の評価がある。本稿では、教育課程を

評価することの意義やその方法について論じることができなかった。そして、本稿では、大手町小学校の優れた研究・実践を取り上げ考察の対象とした。しかし、ここで取り上げた1年生以外の教育課程については触れることができていない。大手町小学校の教育課程を詳細に論じることが今後の課題としたい。

注

- 1) 『小学校学習指導要領』、文部科学省HP、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2017/03/31/1383995_2_1.pdf (2017年4月9日閲覧)
- 2) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」pp.4-5。
- 3) 同上。
- 4) 大手町小学校は、1977年に文部省から研究指定を受けて以降、生活科、総合的な学習の時間を中核にした教育課程の研究に取り組んできた。2012年度から2016年度まで、文部科学省からの5回目の指定を受け、教育課程の研究に取り組んだ学校である。
A「実践事例1 資質・能力の育成を目指した独自の教育課程を全校体制で開発」『VIEW21 教育委員会版』Vol.4、2016、p.5。
- 5) 前掲書2)、pp.4-10。
- 6) 前掲書2)、pp.3-4。
- 7) 前掲書2)、p.6。
- 8) 前掲書2)、pp.4-5。
- 9) 前掲書2)、p.5。
- 10) 前掲書2)、p.7。
- 11) 前掲書2)、p.10。
- 12) 前掲書4)、pp.5-7。
- 13) 「大手町小の教育課程」『2016 大手町小学校 研究紀要 Let's go to the Next Stage』新潟県上越市立大手町小学校、p.25、p.27。
- 14) 同上、p.25。
- 15) 同上、p.26。
- 16) 前掲書4)、p.5。同上、p.27。
- 17) 前掲書4)、p.5。
- 18) 「生活・総合」『2016 大手町小学校 研究紀要 Let's go to the Next Stage』新潟県上越市立大手町小学校、p.95。
- 19) 「視覚的カリキュラム 第1学年」『平成24年度～平成26年度 文部科学大臣指定研究開発学校 真の〈自立〉と〈共生〉を目指す教育課程の創造 大手町小学校研究会』新潟県上越市立大手町小学校、2015年、p.75。
- 20) ①四月は生活年齢によるクラス分け、②机のない「広い学習スペース」の活用、③一日の始まり、学年合同実施、④各領域と関連させたカリキュラム、⑤全職員による支援、⑥全校縦割り班によるなかよし活動、⑦教育サポーターの活用。「大手町小の安心スタートプラン！ すべての子どもが『学校って楽しい』と実感できる新学期をつくる」『2016 大手町小学校 研究紀要 Let's go to the Next Stage』新潟県上越市立大手町小学校、p.43。
- 21) 同上、p.43。
- 22) 「各学年視覚的カリキュラム表と6領域カリキュラムベース」、新潟県上越市立大手町小学校、p.1。
- 23) 「やぎさん絵本『やぎさんといっしょ』〈ことば〉1年2組、授業者上原希、『平成24年度～平成28年度 文部科学大臣指定研究開発学校 真の〈自立〉と〈共生〉を目指す教育課程の創造 大手町小

学校研究会 Let's go to the Next Stage』新潟県上越市立大手町小学校、pp.18-19。

- 24) 「大手町小の教育課程」『2016 大手町小学校 研究紀要 Let's go to the Next Stage』新潟県上越市立大手町小学校、pp.26-27。

引用・参考文献

笠原正（2017）「子どもたちの未来を展望して」『2016 大手町小学校 研究紀要 Let's go to the Next Stage』新潟県上越市立大手町小学校、p.3。

田村知子（2016）『カリキュラムマネジメント—学力向上へのアクションプラン』日本標準。

田村学（2017）『カリキュラム・マネジメント入門』東洋館出版社。

新潟県上越市立大手町小学校（2015）『2014 大手町小学校 研究紀要 未来を創る 自分をつくる』。

(2017年3月31日提出)

(2017年4月17日受理)